

《書評》

『ポスト資本主義時代の地域主義： 草の根の価値創造の実践』

真崎克彦*・藍澤淑雄**編、中西典子***・秋吉恵****ほか著、
明石書店、2024年

木村力央†

I. はじめに

本書は、国際開発学会の「市場・国家との関わりあいから考える地域コミュニティ開発」研究部会での発表成果をまとめたものである。ポスト資本主義に依拠した地域主義の考え方を解説し、その十以上の事例を掲載・比較考察している。経済学者から人類学者まで多様な分野の専門家により執筆された学際的な研究成果である。

II. 本書の目的・方法論・構成

本書はK・ポランニーやJ・K・ギブソン・グラハムなどの理論を援用しつつ、地域に根差した実践を比較事例分析することにより、近年活発に議論されているポスト資本主義の再理論化を試みている（Eisenhardt and Graebner, 2007）。つまり大まかな方法論として、演繹的（理論の天下り）及び帰納的（事例からのたたき上げ）アプローチの両方を援用している。このような分析プロセスを通して、本書は地域主義に根差したポスト資本主義の構築を目指し、また実践と理論の両方に裏打ちされたインプリケーションを読者に提供しようとしている。

以下で本書の構成を紹介し、その後簡潔に内容をみていく。

序文

はじめに

第1章 ポスト資本主義時代における地域主義（真崎克彦）

第2章 「公共」の再審と地域社会：「私」を開き「共」を通じて「公」と向き合う地域社会の実

* 甲南大学マネジメント創造学部教授

** 青山学院大学地球社会共生学部教授

*** 立命館大学産業社会学部教授

**** 立命館大学共通教育推進機構教授

† 立命館アジア太平洋大学サステナビリティ観光学部教授

rkimura@apu.ac.jp

践に向けて（中西典子）

第一部 協同性に根差したローカル経済

第3章 地域から掘り起こす新しい「豊かさ」：東日本大震災を経験した福島県二本松市の取り組みから（斎藤文彦）

第4章 社会的連帯経済における互酬性の役割：パキスタンのイスラム金融マイクロファイナンス機関・アフワット（高須直子）

第5章 加工業者・グループの発展とローカル経済の関わり：タンザニア・モロゴロ州における「混合粥の素」の生産（加藤〔山口〕珠比）

第6章 地域と「共にある」コミュニティ経済振興：ブータン山村の乳業協同組合（真崎克彦）

第二部 ローカリゼーションとレジリエンス

第7章 依存的自立を高めるしなやかなローカリゼーション：国内外のエコビレッジとトランジション運動（平山恵）

第8章 さまよう地域、漂う地域：太平洋島嶼における地域主義の多層性と戦略的依存（関根久雄）

第9章 「取り残された地域」にとっての持続可能な開発目標：インドネシア・西ティモールの事例（堀江正伸・森田良成）

第三部 地域のつながりで育つ子ども

第10章 地域主義の視点から見た子ども食堂：コロナ禍の青森県における事例からの考察（平井華代）

第11章 子どもが紡ぐ社会的結束：ヨルダンの取り組みから（松田裕美）

第四部 地域と関わり合う教育

第12章 持続可能な地域づくりへの大学の関わり：茨木中山間地域における取り組みから（秋吉恵）

第13章 地域の価値創造への大学のかかわり：館ヶ丘団地における取り組みから（藍澤淑雄）

おわりに

第14章 あいだの開発学の可能性：秋田と南アフリカの起業家たちの学び合い（工藤尚悟）

第15章 地域主義の意義と可能性：課題を考察する（藍澤淑雄）

「はじめに」では、ポスト資本主義における地域主義の概要・理論（第1章真崎）及び、日本の新自由主義の文脈における地域社会のディスエンパワメント（第2章中西）が議論され、後続の章における事例分析の土台を提供している。第一部「協同性に根差したローカル経済」では、各事例を通して「関係性に裏打ちされた主体性」（第3章斎藤）、互酬性（第4章高須）、非貨幣的取引・関係（第5章加藤）、協同性（第6章真崎）などの、ローカル経済におけるコレクティブな行為主体性やソーシャル・キャピタルの重要性を示している。第二部「ローカリゼーションとレジリエン

ス」では、どのように地域社会のレジリエンスが形成され（第7章平山）、またそれがどのように発揮され、そして損なわれるか（第8章関根；第9章堀江・森田）解明している。第三部「地域のつながりで育つ子ども」では、子供、その家族、及び地域のその他のステークホルダーを巻き込んで「子供が成長しやすい地域社会」を形成している事例が、互酬性（第10章平井）や社会的結束（第11章松田）などのキーワードを通して解説されている。第四部「地域と関わり合う教育」及び第14章「あいだの開発学の可能性」においては、地域社会の外部者・内部者の「あいだ」（第12章秋吉；第13章藍沢）や、全く異なる地域社会の者同士の「あいだ」（第14章工藤）を「つなぐ」試みが分析されている。最終章の第15章ではポスト資本主義における地域社会の可能性として、これまでの事例の比較から明らかになった示唆をまとめている。

Ⅲ. 本書の持つ意義

本書の十数の事例は、国内外の多様な文脈及びセクターにおける実践について分析している。本書のサブタイトルが「草の根の価値創造の実践」となっているように、取り上げられている事例の多くは「何がうまくいくか」というプラグマティックな視点から書かれている。このプラグマティズムが、本書の強みでもあり課題でもある。そして、最終章において事例を通して浮かび上がってきた教訓をまとめ、ポスト資本主義の再理論化を試みている。したがって読者は、関心がある文脈やセクターにおける実践的洞察及び、ある程度一般化した知見を得ることができる。

より重要なのは、K・ボランニーやJ・K・ギブソン・グラハムの経済における非市場的・非貨幣的要素（例えば互酬性、協同性）を主な理論フレームとして事例分析することにより、ポスト資本主義の一つの輪郭を提示していることだ。そのフレームは地域主義（例えば共同体の一体感、地産地消）と親和性が高く、本書はポスト資本主義－地域主義ネクサス構築の試みでもある。興味深いのは、上述の通りプラグマティズムを主要な存在論・認識論的ポジショナリティとしているため、二項対立的・弁証論的に市場・貨幣経済を非市場的・非貨幣的要素の「対抗」としている訳ではなく、それらも「うまく使う（harness）」オルタナティヴを提示している。また同じ理由で、本書は「すっきり」した理論ではなく、『もやもや』とした『差異』と『偶発性』に依拠した試行錯誤を通じた実践を探求している（第1章真崎：26頁；渡邊，2023；Elder-Vass, 2022）。それは、複数のアクターや思想の「あいだをつなぎ」、混ぜ合わせることであり、変容していくアプローチと言える（第12章秋吉；第13章藍沢；第14章工藤）。したがって、斎藤幸平のうたう反資本主義の脱成長コミュニティや、開発学における脱開発論のような「差異を顕在化させる」「すっきり」した思想とは一線を画し、より「包摂的」で“messy”なそれを提示している（第1章真崎；第14章工藤；第15章藍沢）。

Ⅳ. 本書の課題と発展可能性

一方プラグマティズムにありがちなフラットな存在論・認識論のため、実践や分析がミクロ・レベル及び可視化できる領域（特に社会構築主義的現象）に限定されている傾向があると感じた（Elder-Vass, 2022; Heeks et al., 2024）。結果として、序盤第2章で中西が新自由主義による地域社会のディスエンパワメントという構造的な分析視点を提示して舞台を設定したにも関わらず、ミクロ・レベルに影響を及ぼすマクロ・レベルの要素（例えば政府の作為・不作為）の分析及び、可視化できない抑圧的な社会構造や権力関係の影響などの多層的な分析が十分でないと思われる事例が後

続章において散見された。つまり、「そもそもなぜそのような状況が存在するのか」という視点が弱いように感じられた。

そのため、存在論・認識論的ポジショナリティとして、マクロ・レベル及び可視化できない構造やその発生メカニズムや偶発性を分析射程に入れた批判的实在論（Elder-Vass, 2022; Heeks et al., 2024）などや、実践的フレームとしマクロ・レベルを含んだ社会構造変革を目指す人権基盤型アプローチなどを追加で援用することが考えられる。これらにより、上述した非市場的要素を包摂した横軸的に広い分析だけでなく、構造などを射程に入れた縦軸的に深い分析が可能となり、よりホリスティックな発見・洞察が表出すると考えられる。それは第 15 章で藍沢が述べている「複数の現象の相互関係性、複雑性を踏まえて全体のダイナミックスを捉える」関係論的視点と親和性がある（288 頁）。実践面においても、各事例の実践が、どのような社会条件を有する文脈では「うまくいく」可能性があるかというリレバンスの問いに対して、より精緻な解を出すであろう（Heeks et al., 2024）。換言すればそのようなアプローチは、「包摂的」で“messy”なポスト資本主義の理論フレームにおいても、実践のための一定の方向性を与えるのではないだろうか。

参考文献

渡邊悟史（2023）「まごつきながら反芻すること：地域活性化ではなく地域社会を考えるために」渡邊悟史・芦田祐介・北島義和編著『オルタナティブ地域社会学入門：「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』ナカニシヤ出版，127-137 頁。

Eisenhardt, K. M. and M. E. Graebner. 2007. Theory Building from Cases: Opportunities and Challenges. *Academy of Management Journal*, 50 (1), 25-32. <https://doi.org/10.5465/AMJ.2007.24160888>

Elder-Vass, D. 2022. Pragmatism, Critical Realism and the Study of Value. *Journal of Critical Realism*, 21 (3), 261–287. <https://doi.org/10.1080/14767430.2022.2049088>

Heeks, R., P. J. Wall, and M. Graham. 2024. Pragmatist-Critical Realism as a Development Studies Research Paradigm. *Development Studies Research*, 12 (1). <https://doi.org/10.1080/21665095.2024.2439407>